

1 近代以前ヨーロッパにおける医学実地書の系譜

坂井 建雄

順天堂大学医学部

近代以前ヨーロッパの大学医学部においては、医学理論 *theoria* と医学実地 *practica* が、学則、教授職およびカリキュラムの上で区別されていた。医学理論では元素や体液など医学に関わる一般原理を説明し議論し、医学実地では健康の保持と回復のための手段について解説する。フックス (1501-1566)、ゼンネルト (1572-1637)、リヴィエール (1589-1655)、プールハーフェらは、医学理論と医学実地の両方の教科書を著している。医学理論の教科書は、16世紀のフェルネル (1497-1558) の『医学 (Medicina)』(1554) から始まり、18世紀初頭のプールハーフェ (1668-1738) の『医学教程 (Institutiones medicae)』(1708) にまで至ること、生理学、病理学、徴候論、健康論、治療論の5部構成を持つことがよく知られている。これに対して医学実地の教科書は注目されることが少なく、Wear (1985) が予備的な考察を行ったのみであったが、最近 Coste (2008) がパリ健康大学間図書館の所蔵する医学実地書について評価と分析を行い、医学実地 *Practica medicinae* という書物のジャンルが存在することを明らかにした。

18世紀以前の医学実地書を2つの方法で探索し、網羅的に収集・調査した。第1の方法は、医学実地書としての表題をもつ著作を探索するもので、“*practica*”, “*praxis*”を手がかりにした。第2の方法は、医学実地書としての内容をもつ著作を探索するもので、医学史に登場する18世紀以前の医師の著作、および表題から医学書と判断される著作について、内容から医学実地書と判断した。

最初の医学実地書は11世紀前半のガリオポントゥスの『受難録 (*Passionarius*)』で、伝承した古代の医学書をもとに、頭から足までの部位毎の疾患と熱病を収載した網羅的・体系的・実用的な医学書で、広く用いられた。第1期の1500年頃まで(9人による9著作)は冊子写本として書かれ、それ以後は印刷出版を前提として書かれた。第2期の1630年頃まで(18人の21著作)はフランスとイタリアの著者が多かった。第3期の1710年頃まで(18人の19著作)およびそれ以後の第4期(17人の18著作)はドイツとオランダの著者が多かった。18世紀後半から疾病分類学書に次第に置き換わり、18世紀末のブルセリウスの『医学実地教程』が最後となった。医学実地書の多くは頭から足までの部位別に疾患を配列する原初形を維持したが、機能による分類やABC順などの形をとるものも現れ、また治療法一般や薬局方など総論的な内容をもつものも現れた。

11世紀前半のガリオポントゥスから18世紀末のブルセリウスまで700年間にわたって、医学実地書はさまざまな派生形を生み出しながらも、熱病+頭・胸・腹の部位別という基本的な構成を保ち続けた。医学実地書が書かれ続けた700年間には、人体の構造と機能についての理解は深化し発展したが、それにも拘わらずこの間に医学実地書が基本的構成を保ち続けたのは、疾患についての理解が本質的に変わらなかったことを意味すると思われる。

医学実地書は、18世紀末のブルセリウスの『医学実地教程』を最後に消えてしまう。これに代わって18世紀後半から19世紀初頭にかけてヨーロッパの医学界には疾病分類学が広まった。これは植物分類学を範にして、症状などの類似性にしたがって疾患を分類するものであった。さらに19世紀に入ると医学書の内容と構成は大きく変化し、19世紀後半には現代の臨床医学書に近い器官系統別のものが現れた。